

東京大学五月祭の歴史

—東京帝国大学におけるその起源と変遷—

大学経営・政策コース 佐藤寛也

The History of the University of Tokyo May Festival (*Gogatsusai*)
—Its Origins and Evolution During the Tokyo Imperial University Years—

Hiroya SATO

History of campus festivals is an important topic of historical studies on the university. The purpose of this study is to describe the history of the campus festival of the University of Tokyo, or *Gogatsusai* (May Festival), based on materials such as programs and articles of the *Teikoku Daigaku Shimbun* (Imperial University Newspaper). This event, which was begun as the *Dai-enyukai* (Garden Party) in 1923, has changed to the present *Gogatsusai* after evolution including two interruptions.

目次

- はじめに
 - 学園祭の歴史
 - 筆者の関心と本稿の意義
 - 五月祭とは
 - 使用する資料
- 大園遊会・大懇親会
 - 東京帝国大学の成立と学生生活改善運動
 - 帝国大学学友会の成立と発展
 - 大園遊会の開催
 - 関東大震災と第2回学友会大懇親会
 - 第3回以降の学友会大懇親会
 - 帝国大学学友会の解散
- 連合学部会、全学会五月祭
 - 全学公開の復活（連合学部会）
 - 連合学部会の運営体制
 - 「五月祭」の名の起こり
 - プログラム
 - 全学会五月祭
- 現在の五月祭へ
 - 戦後五月祭の復活
 - 第22回五月祭と回次の謎
 - 五月祭常任委員会の誕生
- おわりに
 - 小括
 - 本稿の成果と今後の課題

1. はじめに

1-1. 学園祭の歴史

日本の大学では、その多くにおいて学園祭（大学祭）が開催されている。これらには旧制高等学校の寮祭を起源とするものもあるが、大学全体の祭典として学園祭が全国の大学で行われるようになるのは1950年代半ばからであると言われている¹⁾。こうした学園祭の中でも、東京大学の全学学園祭「五月祭」は、大正期にそのルーツを遡ることができる、日本でも最古の学園祭のひとつである。

しかし、従来の大学史研究において学園祭の存在が注目を浴びることは多くなかった。個々の学園祭に着目しても、名古屋大学「名大祭」についての研究²⁾、京都大学の学園祭等の学生行事についての研究などいくつかの例が見られるものの³⁾、数は限られている。東京大学の五月祭については、その草創期について寺崎昌男『東京大学の歴史』において1章を割いて述べられているほか⁴⁾、東京大学の学内広報において五月祭の歴史を概説したものなどがあるが⁵⁾、東京大学史についての基本文献である『東京大学百年史』においても、五月祭に関する記述はその創始について簡単に触れられているのみであり、五月祭の全体像を把握するには不十分と言わざるを得ない⁶⁾。学園祭がどのようにして起こり、どのように変化してきたかの分析することは、大学が、学生が、そして大学と学生の関係

が、どのように変化してきたかをより深く理解するうえで重要な研究となるだろう。

1-2. 筆者の関心と本稿の意義

筆者はこうした問題関心の下、五月祭の起源と、それが現在に至るまでの変遷とを、史資料に基づいて正確かつ詳細に叙述することを自らの研究課題とした。これによって従来蓄積されてきた東京大学史の欠陥を補ったうえ、大学にとって学園祭とは何であるか、時代とともにどう変化し、そして何が変化しなかったかについて考察したい。

本稿は、その研究課題の一環として五月祭の草創期に着目し、大正期に五月祭の前身となる行事が創始され、2度の中断を経て戦後にこの行事が「五月祭」として定着するまでをまとめるものである。

1-3. 五月祭とは

東京大学の全学学園祭である五月祭は、一般に学園祭のメインシーズンとされる秋ではなく、初夏の5月に開催される。5月中下旬の週末、土曜日と日曜日の2日間に亘って本郷地区の本郷キャンパスおよび弥生キャンパスを会場として開催され、近年は15万人に近い来場者数を記録する。東京大学の全国的な知名度も相まって、開催が全国紙やテレビ番組などで取り上げられることも多く、日本を代表する学園祭のひとつとなっている。

東京大学ウェブサイトによれば、五月祭は「大正12年5月5日に行われた第1回大園遊会が起源とされる歴史ある学園祭」と紹介されている⁷⁾。五月祭は、幾度かの中断を含む様々な変遷を経ながら、2019年5月に第92回を迎えるに至った。東京大学創立150周年となる2027年には、ちょうど第100回を迎える計算となる。

1-4. 使用する史資料

本稿の執筆にあたり、五月祭のプログラム・パンフレット、およびその開催の様子を伝える帝国大学新聞・東京大学新聞の記事収集に努めた。多くは東京大学附属図書館および同文書館に所蔵されているが、一部の欠損については、個人蔵のものを提供してもらい可能な限り埋めた⁸⁾。また、第1回大園遊会について書かれた最初期の帝国大学新聞は、日本近代文学館に所蔵されていたものを参照した。

2. 大園遊会・大懇親会

2-1. 東京帝国大学の成立と学生生活改善運動

1877年に東京開成学校と東京医学校を合併させることによって創設された東京大学は、日本最初の近代の大学であった。創設当時、本郷には1876年11月に移転を完了していた東京医学校が医学部となって置かれ、それ以外の法・文・理の3学部は神田錦町に置かれていた。法学部と文学部、そして最後に1888年12月に理学部（当時は既に帝国大学理科大学）が移転を完了し⁹⁾、初めてすべての学部が本郷地区に集まったのである¹⁰⁾。

諸学校が合併を繰り返して各々の学部（分科大学）を構成してきた経緯から、帝国大学は創設当初から分科大学の連合体として存在し、全体としてひとつのまとまりに欠くという課題を抱えていた¹¹⁾。学部（分科大学）間の学生の相互交流の少なさは学生の不満につながり、全学規模で学生の相互親睦行事を開催することを求める学生生活改善運動が起こった¹²⁾。学生たちは全学規模での相互親睦行事——すなわち後の大園遊会——の実現を求めたが、その実現は全学規模の学生組織「東京帝国大学学友会」の成立を待つこととなる。

2-2. 帝国大学学友会の成立と発展

帝国大学では、複数の運動部が連合して1886年7月に帝国大学運動会を設立していた（1898年に社団法人化）。1920年時点の加盟団体は、漕艇部、陸上運動部、球技部、水泳部、柔道部、撃剣部、弓道部の7部であった¹³⁾。時代の変遷とともに運動部以外の団体にもその対象を広げるべきとの声が高まり、1920年には東京帝国大学学友会と名を改め、いわゆる文化系の諸部も対象に広げるかたちでその組織を拡大させた。この改組は、1919年に東京帝国大学が分科大学制から学部制に移行し、学部間の学生の相互交流の動きが高まったことや、学生からの自治組織設立を求める動きが顕在化しつつあったことなどを受けた、大学側の対応としてなされたものであろうと指摘されている¹⁴⁾。

しかし、この改称・拡大はあくまでも既存組織の拡大にすぎなかった。帝国大学学友会に加盟する各部に属さない学生も含むすべての学生を組織化した、学生全体を代表する組織の設立という目標は達せられていなかったのである¹⁵⁾。1922年になると、学生生活改善運動の中で、帝国大学学友会と各学部の学友会が機能の重複を起こしているとの指摘から、帝国大学学友会拡充の機運がさらに高まった¹⁶⁾。こうした状況の中、

12月22日の帝国大学学友会常務委員会において、帝国大学学友会を「此際全然改革して学生生活の根本的充実を計る組織たらしむ可く」決議がおこなわれた¹⁷⁾。すべての学生を帝国大学学友会各部への所属の有無に関わらず会員とすることで、帝国大学学友会を、学生の総意を集約し、発表し、そしてそれを実行する組織として位置づけようとしたのである。

この決議は評議会に提出され、大学としてもこれを認める意向が示された。1923年3月12日の評議会で「全学生ヲ学友会員トナスコト」が決定され、新しい帝国大学学友会の誕生が認められた¹⁸⁾。

新たな帝国大学学友会の誕生とともに新年度を迎えた1923年4月18日、従前から根強かった全学規模での学生の親睦行事を求める声を背景に、帝国大学学友会常務委員会はさっそく新入生歓迎行事を兼ねた全学の大園遊会の開催を決める。期日は同年5月5日(土)とされた。開催の要請を受けた総長および各学部長もこれに賛同し、当日は授業を休講し、盛大に開催することとした¹⁹⁾。これが現在の五月祭に至る起源とされる第1回大園遊会の起こりである。

2-3. 大園遊会の開催

こうして、学部や帝国大学学友会各部の枠組みを超えた学生の相互交流・親睦を目指す「大園遊会」の企画が立ち上がった。主催は帝国大学学友会であり、運営も帝国大学学友会の各部が分担して担う体制がとられた。法学部緑会、医学部鉄門倶楽部など、各学部の学友会がそれぞれの学部の開放参観を担当するほか、演説会は弁論部、園遊会は庭球部・陸上運動部・蹴球部、活動写真はスキー山岳部・スケート部・文芸部、といった具合である²⁰⁾。園遊会入場券、園遊会の飲料券、活動写真券は各学部の事務室で事前に販売された²¹⁾。

大園遊会の開催を告知する帝国大学新聞の号外によれば、第1回の大園遊会の次第は次のとおりであった²²⁾。

- 一. 各学部開放参観 (切符不要)
 - 自午前8時至正午
- 一. 大演説会 (切符不要)
 - 自午後12時半至午後3時
- 一. 園遊会 (園遊会入場券)
 - (雨天順延) 自午後3時至夕刻
 - 音楽演奏
 - 大神楽
- 一. 活動写真 (活動写真券)

自午前6時至午後9時

雨天の際は園遊会だけは順延して他のものはやります

各学部開放参観は、各学部学友会の手により、法・医・工・文・理の5学部でそれぞれおこなわれた。法学部では刑法学の岡田教授の拷問用具コレクションが展示され、医学部では人体標本、工学部では各種の機械など、文学部では考古遺物など、理学部では実験展示や地質標本などが展示された²³⁾。

午後から計画された大演説会は、総長からの挨拶と帝国大学学友会全体の紹介のあと、帝国大学学友会の各部がその活動内容を紹介する(17部が各5分)というもので、新入生歓迎会行事の側面を強く持つものであった。会場は35番教室を予定していたと推測されるが²⁴⁾、この演説会が実際に開催されたかは疑わしい。当日の様子を伝える後日の帝国大学新聞の記事によれば、各学部の開放参観が終わった後、学生たちは八角講堂に集まり学生大会を開催していたからである。学生大会では学生の自治問題が議論されたという²⁵⁾。

その後の園遊会は育徳園心字池の周辺および山上御殿で開催され、入場券は一般学生1円、学士(卒業生)は1円50銭、教職員は無料招待であった。15時からの開始が予定されていたが、実際に始まったのは15時半であったようだ。

この日について、帝国大学新聞は「学生大会は東大の歴史に一時期を画すべき」ものであったと評し、また園遊会についても歓を尽くした会であったと記録している²⁶⁾。翌年の帝大新聞によれば、このとき「3,500の学生が楽しみを共にした」のだという²⁷⁾。かねてより待望された全学規模の大園遊会が実現し、盛会に終わったことで、この行事を毎年開催する年中行事として定着させることが志向されたことは想像に難くない²⁸⁾。

2-4. 関東大震災と第2回学友会大懇親会

初めての園遊会から4ヶ月後の9月1日、関東大震災が東京を襲った。地震による火災で、八角講堂や(旧)図書館をはじめとする学内の多くの建物が消失するなど、東京帝国大学も大きな被害を受けた。

そうした厳しい状況下ではあったが、翌1924年も大園遊会は前年に倣って無事に開催された(5月24日)。帝国大学新聞の記事をみると、見出しにおいて「東大学生自治の祝祭」と称されていることや、本文においても学生自身の手で余興を作りあげることがより強調されている²⁹⁾。

一方、第 1 回の際と異なり全学の学生大会が開催された様子はなく（ただし、学部開放と同じ時間帯、午前 10 時から法学部の学生大会が開かれている）、園遊会（懇親会）の時間が拡大し、余興の充実がはかられている。第 2 回の次第は次のとおりであった³⁰⁾。

- 一. 午前 8 時煙火号音を以て開会を報す
- 二. 同時刻各学部の開放
- 三. 正午園遊会を開き、水菓子及団子を配布する
- 四. 正午過ぎより新国劇澤田正二郎氏一派の演劇開始
- 五. 午後 3 時演劇終了、すし及飲料を配布
- 六. 同時にマンドリンクラブの演奏及戸山学校陸軍楽隊の演奏及その他余興
- 七. 午後 7 時よりグラウンドにて松竹キネマのニコニコ大会
- 八. 右終わって万歳三唱閉会

各学部の解放では各学部の展示が行おこなわれ、医学部の人体標本の展示が前年に引き続き多くの来場者を集めたほか、理学部の地震学教室が関東大震災の記憶新たな中で盛況を極めたほか、工学部では無線電信の実験がラジオの流行に乗じて人気を得るなど、時世に応じた企画が盛んであった³¹⁾。

2-5. 第 3 回以降の学友会大懇親会

翌年の 1925 年、第 3 回の次第は次のとおりで第 2 回と概ね同じであった³²⁾。

- 一. 午前 8 時開会（煙火を以て報ず）
- 二. 同時刻各学部開放
- 三. 午前 11 時半園遊会場を開く 模擬店開店
- 四. 正午過ぎより新民衆座の演劇開始
- 五. 総長挨拶
- 六. 午後 3 時演劇終了
- 七. 同時に戸山学校軍楽隊演奏其他
- 八. 午後 7 時グラウンドに於て松竹キネマの映画公開
- 九. 万歳三唱閉会

特筆すべき点として、学部開放の一環として法・文・経済 3 学部の連合による講演会が催されている。3 学部の新進教授・助教授が講演をおこなった³³⁾。

安田講堂が竣工するのがこの年の 7 月である。

続いて 1926 年、5 月 7 日・8 日と、4 年目に至って初めて、1 日目に全学開放・2 日目に大園遊会という 2 日間に亘る開催となった。これにより次第も大幅に

変更となっている³⁴⁾。

5 月 7 日（金）

各学部開放

一. 医・工・理 3 学部開放（午前 10 時——午後 3 時）

二. 法・経・文・農合同講演会（午後 1 時——3 時）
大講堂

5 月 8 日（土）

園遊会 於運動場附近（雨天なれば 9 日）

一. 奏楽（午前 10 時半）戸山学校軍楽隊

二. ページェント（正午——3 時）舞台協会 } 合同
A 「シーザーとアントニオ」3 場 青い鳥劇団
B 「思ひ出」——アルト・ハイデルベルヒ——1 場

三. 奏楽（午後 3 時）

四. 活動写真映写（午後 6 時半——9 時）松竹キネマ提供

A 「美人食客」全 7 卷

B 「お坊ちゃん」全 12 卷

——注意——入場は必ず制服制帽靴または草履のこと

学部開放は理系の 3 学部（医・工・理）となり³⁵⁾、残り 4 学部（法・文・農・経済）は講演会形式となった。駒場に置かれていた農学部が、講演会形式で初めて参加している。講演会は前年 7 月に完成したばかりの安田講堂で行われ、あいにくの雨天にも拘わらず 1,500 人の聴衆を集めた。この年の講演会形式の導入や 2 日間開催への拡大などは、安田講堂竣工後最初の開催であったことと無関係ではないだろう。2 日目の園遊会は雨天順延と設定されており、朝 8 時に煙火 1 発であれば決行、2 発で翌日に順延と定められていたが、無事に天気は回復し「心残り無く晴れ上った」。園遊会には卒業生でもある若槻礼次郎首相（当時）が午後 2 時半ごろ訪れ、演説を行ったことが記録されている³⁶⁾。

その年末、1926 年 12 月 25 日に大正天皇が崩御し、時代は昭和へと移る。

昭和初回となる第 5 回大懇親会は、1927 年 5 月 7 日・8 日に前年の形式を踏襲した 2 日間開催であったが、ページェント（野外演劇）と軍楽隊はなかった³⁷⁾。園遊会では団子 5,400 本が無料配布され、2,500 人分の寿司がなくなったという。

この回は帝国大学新聞に次第の掲載がない。前後の記事に書かれた情報を整理してまとめたものが次のものである³⁸⁾。

- 5月7日
 午後1時～ 大講堂で法・経済・文・農学部合同講演会
 夜 工学部大講堂で活動写真
 5月8日
 午前10時～ 大講堂で文芸部主催講演会（佐藤春夫，武者小路実篤）
 正午～ 総長挨拶，園遊会
 両日
 医・工・理学部の一般公開
 いずれかの日の夜
 大講堂で弁論部主催講演会（代議士）

医学部の一般公開は大変な人気で，委員の手に負えず警察官に交通整理を依頼する事態になった。後に医学部の委員は「これ以上医学部の宣伝してもらったら困ってしまいます」と述べたという³⁹⁾。

2-6. 帝国大学学友会の解散

こうして年中行事として定着をみた学部開放と園遊会であったが，主催者である帝国大学学友会の解散により中断してしまう⁴⁰⁾。

学友会解散の背景には，左派系・右派系の思想団体の対立による内紛があり，これをきっかけに帝国大学学友会に対して不満を募らせていた運動会各部が脱退して独自に運動会を組織してしまったのである。1928年3月，1923年の成立から僅か5年で帝国大学学友会理事会はやむなく解散を決議した⁴¹⁾。大園遊会は第5回までで途絶えることとなった。

3. 連合学部会，全学会五月祭

3-1. 全学開放の復活（連合学部会）

帝国大学学友会の解散により1928年は大園遊会が開催されなかったが，すぐに学生の間にはふたたび全学開放を実施したいという声が高まり，翌1929年に復活が計画された⁴²⁾。

しかし，大学との交渉は経費負担の問題で難航する。学生は1,200円の補助金を要求したが，大学が会計課長，学生課長，庶務課長等で協議して提示した補助額は350円であった。学生主事を通じてこの金額を伝えられた学生側は反発する。交渉の過程で学生は670円まで譲歩したが，交渉は難航し，一時は学生が「学部開放の催しを断然取止めるとの決意を示して席を蹴らんとするにおよ」んだ。最終的に小川義章学生

主事の仲介により，3度目の交渉の席に至って大学が総長の意向を踏まえて譲歩し，開催に至ることができた⁴³⁾。

一方，1928年10月に学生主事に着任し，後に事務局長も務めた石井昶は，大学は学生の思想運動の過激化を懸念していたと述べている⁴⁴⁾。

この年，英国から国賓として来日していたグロスター公を5月4日の午前に東京帝国大学に迎え，その日の午後から翌日5日にかけて全学開放が行われた。1日目の天気はあいにくの雨であったが，医学部や図書館の公開に多くの一般来場者が訪れ，やむなく開場を早めるほどの盛況となった⁴⁵⁾。

この全学開放は翌1930年にも開催され，再び毎年の恒例行事として定着する。しかし，全学開放の実行委員会が学生の思想運動の拠点となることが危惧されたことにより，実行委員の学生は大学からの辞令によって任じられるかたちにとられた。また，実行委員会はその年度限りで解散する単年度組織となるよう定められ，常置の機関となることが避けられた⁴⁶⁾。帝国大学学友会の解散後も各学部の学友会は引き続き存続していたため，これらから代表が選出されて集まり，その年ごとに実行委員会に相当する組織が組織され，これは連合学部会と称された⁴⁷⁾。

3-2. 連合学部会の運営体制

帝国大学学友会が主催していた大園遊会の時代と異なり，常置の主催団体を持たなかった連合学部会は，行事の名称であると同時にその運営組織の名称でもあった。連合学部会は，各学部の学友会から選出された委員によって構成される連合学部会（あるいは連合学部会実行委員会）の手によって開催されていたのである。

石井の回想によれば，全学開放の再開にあたり，学生の思想運動の拠点となることを危惧し，1年ごとに委員を入れ替え，常置の機関としないような配慮がなされたという⁴⁸⁾。法学部緑会，文学部学友会，経済学部経友会の文科系3学部の学友会が輪番制で本部（連合学部会全体の本部機能），学術講演会，文芸映画会を分担し，理科系各学部の学友会はそれぞれの学部開放を運営する仕組みが形成された⁴⁹⁾。1929年以降の3学部学友会の分担は次のとおりであった⁵⁰⁾。

開催年	本部	講演会	映画会
1929年	法	文*	経*
1930年	経	法*	文*

1931年	文	経	法	(中断)
1932年	経	法*	文*	1929年 「全学開放」
1933年	法	文	経	1930年 「(各学部連合主催)全学公開」, 「全学的公開」
1934年	文	経	法	1931年 「全学公開」
1935年	経	法	文	1932年 「(連合学部会)全学開放」, 「大学博覧会」
1936年	法	文*	経*	1933年 「(連合学部会による)全学開放」, 「大学の五月祭」, 「大学五月祭」
1937年	文	経	法	1934年 「大学五月祭」, 「全学公開」, 「五月祭」
1938年	経	法*	文	1935年 「大学五月祭」, 「全学開放」, 「本学開放祭」
1939年	法	文*	経	1936年 「大学五月祭」, 「“五月祭”」, 「全学開放」, 「連合学部会」
1940年	文	経	法	1937年 「五月祭」, 「『大学の祭』」, 「大学五月祭」, 「全学開放」
*を付したものは前後のローテーションに基づく推定。 (1941年以降は帝国大学全学会の主催となる。)				1938年 「五月祭」 ⁵⁶⁾ , 「“五月祭”」, 「“大学の祭”」
				1939年 「五月祭」, 「“大学祭”」
				1940年 「五月祭」, 「“五月祭”」, 「“大学祭”」

3-3. 「五月祭」の名の起こり

五月祭の起源となったこれらの各種行事は、当初から五月祭と題されたわけではなかった。プログラムの表紙に「五月祭」と題されたのは、東京帝国大学全学会による主催となった1941年の「全学会五月祭」が初めてであることがほぼ間違いない⁵¹⁾。

それ以前のプログラムのうち、現存が確認できているのは1934年と1940年の2回分のみだが、これらはいずれも「東京帝国大学連合学部会」と題されている。また、当時この行事の開催にあたってその日を休業日とする旨を定めた文書に「来ル5月4日(土曜日)連合学部会挙行二付当日臨時休業ス〔下線引用者〕」と書かれていることから、この行事の名称が連合学部会と総称されていたことがうかがえる⁵²⁾。

一方、帝国大学新聞においては、表現の揺れが見られるものの、以下のように称されてきた⁵³⁾。1933年に「大学の五月祭」と見出しに用いており⁵⁴⁾、これがこの行事を「五月祭」と呼んだ最初の例である⁵⁵⁾。その後「大学五月祭」や(引用符付きの)「“五月祭”」などの表現を経て、単純に「五月祭」のみでこの行事を指すようになっていく。

開催年	帝国大学新聞紙上の呼称
1923年	「大園遊会」
1924年	「第2回大園遊会」, 「第2回学友会大懇親会」
1925年	「第3回全学大懇親会」, 「学友会大懇親会」
1926年	「各学部開放と全学大園遊会」, 「第4回全学大懇親会」
1927年	「第5回全学大懇親会」

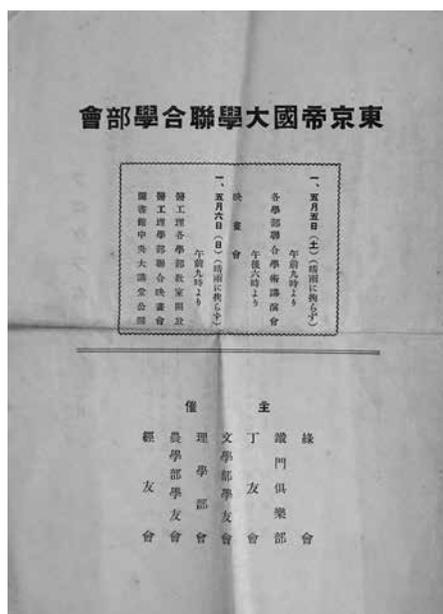
全国紙の記事をみても、1931年には「学内開放」として報じられているが⁵⁷⁾、1935年以降には「五月祭」の用例がみられ⁵⁸⁾、この間に変化があったことが裏付けられる。

こうした紙上の変化に先立って、五月祭という通称が生まれてきたかどうかは定かではない。石井の回想には運営組織が五月祭中央委員会と名付けられたとの記述があるが⁵⁹⁾、これが1929年の全学開放復活当時からのものであったのかは明らかでなく、また1933~1935年の連合学部会本部記録には、「五月祭中央委員会」の語は確認できていない⁶⁰⁾。学術講演会、映画会、各学部それぞれの学部公開など、様々な行事が内包されるこの行事は、正式には総称として連合学部会と名付けられていたが、一般には全学開放(あるいは全学公開、学部開放)の名を用いて呼ばれるなど、様々な呼称が混在していた。その中で、五月祭という通称が起こり、それがこの行事全体の名称として広く定着し、正式名称に採用されるに至ったのである。

3-4. プログラム

行事の次第や構内案内図を掲載した頒布媒体としてプログラムがいつから作成されるようになったかは定かでない⁶¹⁾。第1~4回の大園遊会においては、開催を告知する帝国大学新聞紙上に「プログラム」と題されて全体の次第が掲載されているため、これがプログラムに代わる役割を果たしていたことが推測される。

1932年の連合学部ににおいては、プログラム10,000部が作成されたことがわかっており、ここで初めてプログラム発行の事実が確認できる。1933年、1934年には15,000部、1935年には17,000部と、その発行部数を増やしていった⁶²⁾。1934年のプログラムが実物を確認できた最古のプログラムである⁶³⁾。



現存が確認できる最古のプログラム(1934年, 個人蔵)

3-5. 全学会五月祭

東京帝国大学全学会は、1928年の帝国大学学友会解散以後、それぞれが分立していた各学部の学友会や運動会、その他の学内団体を統合する教職員学生全員加盟制の全学組織である。日中戦争の全面的展開を背景としたいわゆる「挙国一致」体制が構築される中、1940年10月15日に評議会において提起され、翌1941年2月18日評議会での規程が成立した⁶⁴⁾。これにより、五月祭も全学会の主催によるものとなる。

主催団体が変わったが、その内実は従来の各学部学友会による運営を、それぞれの代表者が組織する本部が統括するという構造のまま変わっておらず、行事の内容についても大きく変わったところは見られない。展示や講演の内容が戦時体制の影響を大きく受けたものに変わっていく傾向は、1930年代後半から既に見られたものであった。

こうして戦時下においても五月祭の開催は続いたものの、1943年の秋には学徒出陣が決行され、東京帝

国大学の学生の多くが戦地へ旅立った。残された教職員・学生も一部は千葉に疎開するなどし、こうした中で1944年、ついに五月祭は開催されなかった。

4. 現在の五月祭へ

4-1. 戦後五月祭の復活

五月祭は1945年も引き続き開催されることはなかったが、1946年、終戦の翌年にさっそく復活する。全学会の解体後、それぞれ独立に事業を行うかたちに戻った各学部学友会の連絡統制機関として、学部会連合会が設けられた⁶⁵⁾。1946年のプログラムは現存していないが、帝国大学新聞によれば五月祭準備委員会なる組織の存在が確認できる⁶⁶⁾。3年ぶりの開催とあって約7,000人の人出であったという⁶⁷⁾。

翌1947年には、1946年の夏に全学の学生を代表する機関として新たに発足した学生委員会と称する学生組織が五月祭の担い手となった⁶⁸⁾。学生委員会下に置かれた五月祭準備委員会によって計画が練られ、財源確保のためにプログラムを有料で販売する手法が初めてとられた⁶⁹⁾。来場者数は2万人を超えたという。

4-2. 第22回五月祭と回次の謎

1947年の五月祭にあたっては、帝国大学新聞の記事に「第21回」との記述がある⁷⁰⁾。1948年の五月祭のプログラムには「第22回五月祭」と記されている⁷¹⁾。

しかし、戦前には大園遊会(大懇親会)が5回(1923~1927年)、連合学部会が12回(1929~1940年)、全学会五月祭が3回(1941~1943年)開催されており、合計すると20回開催されていた。1943年の帝国大学新聞にも「誕生以来20回目」との記述がある⁷²⁾。戦後の五月祭は1946年には復活しているため、これが21回目にあたるとするならば、1947年が第22回、1948年が第23回となるはずなのである。

五月祭の起源を取り上げた東京大学学内広報の記事では、戦後の混乱で1946年の五月祭が回数にカウントされていなかったと推測している⁷³⁾。一方、第50回五月祭を迎えるにあたって当時の五月祭常任委員会は、調査の結果「戦時中の〔昭和〕18、19年頃に資料が紛失したか、或いは一期の常任委が二度の五月祭を主催したかということであるらしい」と結論づけていた⁷⁴⁾。いずれにせよ、この回数のずれは現在に至るまで解消されておらず、2019年に開催された第92回五月祭は、1923年の第1回大園遊会から数えると93回目の五月祭であった。

4-3. 五月祭常任委員会の誕生まで

1948年の第22回五月祭、1949年の第23回五月祭のプログラムには「東大五月祭委員会」との主催者表記がある⁷⁵⁾。この時期の主催組織の変遷は正確には不明であるが、翌1950年には五月祭常任委員会の主催となった⁷⁶⁾。各学部の学友会などの学内諸団体から選出された委員が集まって五月祭常任委員会を組織し、各学部ごとに組織される五月祭委員会の連絡調整と全体統括を担うかたちで運営にあたる、現在につながる運営体制の基礎が築かれていった。

5. おわりに

5-1. 小括

1923年の第1回大園遊会を起源とする五月祭であるが、この行事が「五月祭」として東京大学に定着するまでには様々な変遷があった。

まず、第1回大園遊会が実現に至るきっかけは、1923年に全ての学生を会員とする帝国大学学友会が成立したことにある。新入生歓迎・教職員学生相互親睦を目的に開催されたこの行事は、各学部の開放と園遊会（懇親会）を2つの軸とするかたちで始まった。各学部開放は学生が学部の壁を超えて相互参観することに趣旨がおかれていたが、一般にも公開され、帝国大学の学知に触れる機会として市民の高い人気を得た。一方の園遊会（懇親会）は学生、教職員そして卒業生を対象としたものであり、新入生歓迎行事であると同時に、現在のホームカミングデイに近い機能を持っていたとも言えるだろう。

5回を数えた全学開放・大園遊会（大懇親会）であったが、帝国大学学友会の解散によって1927年を最後に途絶えてしまう。1928年には開催されなかったが、すぐに学生の間にはふたたび全学開放をという声が高まっていった。実行委員会が学生の思想運動の拠点となることへの警戒や、経費負担の問題などがあったものの、各学部学友会の共催により1929年には全学開放が復活した（連合学部会）。この連合学部会は、理系学部の開放参観、文系学部による学術講演会、そして映画会という3つの軸によって構成され、園遊会（懇親会）をおこなわない点で、1927年以前の大園遊会との大きな違いであった。

連合学部会が年中行事として着実に定着する中、1933年の帝国大学新聞の記事をきっかけに「五月祭」の通称が生まれ、1930年代のうちに全国紙にもその呼称が見られるようになっていった。1941年に帝国大

学全学会が組織され、全学公開が全学会の主権になるにあたり、正式にプログラムの表題にも「五月祭」が採用された。全学会の主権となっても五月祭の内容は大きく変わることはなかったが、戦争の影響を強く受けるようになっていった。戦時下の物資不足、戦火拡大の影響は避けられず、学徒出陣を契機に1944年は中止となり、終戦まで再開することはなかった。

戦後、1946年には五月祭は復活する。当時のプログラムは現存していないが、東京大学新聞の記事から、戦前の連合学部会や全学会五月祭の後継行事とみなされていたことがわかる。当初は運営母体が転々とするが、1950年から五月祭常任委員会の主催となり、現在に至っている。

5-2. 本稿の成果と今後の課題

本稿では、大正期に大園遊会が創始されてから、戦後この行事が「五月祭」として定着するまでを記述した。これまで、五月祭の前身は大園遊会に始まる一連の行事であった、と理解されてきたが、これらの行事が必ずしも一様ではなかったことは既に述べたとおりである。新たに発見した史資料も用いて、特に連合学部会などの実態を詳細に明らかにしたことは、本稿の成果であるといえよう。

しかし、本稿で対象とすることができたのは、まだ五月祭の歴史全体の3分の1にも満たない。東京帝国大学が新制東京大学となった後も五月祭は続き、戦後の学生運動の高まり——1969年の安田講堂事件で頂点に至り、五月祭は3度目の中止をみる——を経て現在に至っている。「はじめに」で述べた研究課題の達成のため、戦後から現在に至るまでの五月祭の変化も、引き続き追っていきたい⁷⁷⁾。

注

- 1) 窪田眞二「大学祭」『日本大百科全書：ニッポニカ』小学館、ジャパンナレッジ収録（最終閲覧日2019年9月30日）。
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000141371>
- 2) 山口拓史「時代を映す大学祭：名古屋大学『名大祭』の変遷」『大学と学生』通巻493号、6-13頁、2005年9月。山口拓史、堀田慎一郎「名大祭：50年のあゆみ」〈名大史ブックレット14〉、名古屋大学大学文書資料室、2011年。
- 3) 松田陽一『京都大学における「学生の祭」の歴史に関する調査報告書：陸上運動大会・園遊会・文化祭・11月祭を中心にして』私家版、2012年。
- 4) 寺崎昌男「五月祭：東大の祭りのはじめ」同『東京大学の歴史』〈講談社学術文庫〉講談社、2007年、204-213頁。
- 5) 村上こずえ「〈蔵出し！文書館 第12回〉五月祭のはじまり」

- 東京大学『学内広報』1507号, 2018年2月.
- 6) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』全10巻, 東京大学, 1978年。「学友会・運動会・五月祭」の項目(通史第2巻, 464-473頁)で, 五月祭の誕生について記述されている.
- 7) 「五月祭」東京大学ウェブサイト(最終閲覧日2019年9月30日).
https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/events/h10_01.html
- 8) 資料料の所在調査や個人蔵資料の提供について, 五月祭常任委員会委員OBの方に多大なご協力をいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。
- 9) 帝国大学令と同時に合併して帝国大学工科大学となった工科大学校も, 1888年7月に本郷に移転を完了していた.
- 10) 中野実『東京大学物語: まだ君が若かったころ』吉川弘文館, 1999年7月, 12-17頁.
- 11) 東京大学成立の経緯を示す資料には「各科を並列し, 之を包括して東京大学と称す」とあるのみで, 積極的な大学設立の抱負はなかったと言われる(中野前掲著12頁)。この資料の引用元は未確認.
- 12) 帝国大学新聞は「学理の研究以外何等生活らしき生活なきため, 近來学生等は大いに之を不満とし, 学生生活の改善を行ひ学園の沈滞せる空気を一掃すべしとの輿論日に高まりつつある」と報じており, 「学生の自治生活を実現すべき第一歩として, 学生の意思の発表機関たる学生議会のごときもの〔…〕学生に依て作る必要ありとし, その具体案については目下講究中である」とした。(「学生々活改善運動 愈実行期に入る」『帝国大学新聞』1922年9月15日, 第30号, 2面.)
- 13) 『東京大学百年史』通史2, 1987年, 465頁.
- 14) 『東京大学百年史』同箇所.
- 15) 『東京大学百年史』同箇所.
- 16) 「学友会と各学部の緑会, 丁友会, 紫友会, 鉄門倶楽部, 文科学友会などゝ対立して重複せる機関を有し, 二重に金を費し双方共に不完全なる状態にあるは不利益なるのみならず, 各学部学生の親善にも有害なりとして, 行々はその統一運動も起し, 各学部の期間を学友会に併合して学友会の設備を完全にし, 学生生活を一新せんとの意気込みである。この運動に対しては各学部の教授の間にも共鳴者頗る多く, 積極的に応援して居るから遠からず実現する事であらう」(「学生々活改善運動 愈実行期に入る」『帝国大学新聞』1922年9月15日, 第30号, 2面.)
- 17) 『東京大学百年史』通史2, 1987年, 465-466頁.
- 18) 『東京大学百年史』通史2, 1987年, 466頁.
- 19) 当時, 5月5日(端午の節句)は祝日ではなく, また土曜日でも通常は授業が行われていた.
- 20) 「準備委員役割」『帝国大学新聞』号外, 1912年4月30日, 1面.
- 21) 「切符について」『帝国大学新聞』同面.
- 22) 「大会順序」『帝国大学新聞』同面.
- 23) 『帝国大学新聞』同面の各記事.
- 24) 事前の号外(『帝国大学新聞』号外, 1923年4月30日)では記事によって「午後零時半から学生一同を八角講堂に集め」(「学友会主催の下に破天荒の大園遊会」1面), 「零時半から三十五番教室で開かれる筈」(「期待さるゝ各部の宣伝演説」同面)と会場に揺れがあり定かでない。八角講堂では13時から学生大会が開かれている。
- 25) 「総ての権利を 学生大衆の手に」『帝国大学新聞』49号, 1923年5月12日, 3面. 『東京大学百年史』通史2, 1987年, 466頁.
- 26) 「総ての権利を 学生大衆の手に」『帝国大学新聞』同面. 「初夏の風薫る 全学の 大園遊会」『帝国大学新聞』同面.
- 27) 「計画著々として進む 東大学生自治の祝祭」『帝国大学新聞』75号, 1924年5月16日, 3面.
- 28) 同記事では「本大学年中行事の一たる学友会園遊会」と紹介されており, 既に毎年開催する行事という認識が当時からあったことが読み取れる(同上).
- 29) 同上.
- 30) 「大懇親会プログラム」『帝国大学新聞』76号附録, 1924年5月23日, 1面.
- 31) 「効果を収めた 各学部の開放」『帝国大学新聞』第77号, 1924年5月30日, 3面.
- 32) 「大懇親会プログラム」『帝国大学新聞』号外, 1925年5月1日, 1面.
- 33) 「法文経の催して 新進教授の講演」同2面.
- 34) 「プログラム」『帝国大学新聞』号外, 1926年5月7日, 1面.
- 35) プログラム上はそうになっているが, 別の記事によれば文学部心理学教室は研究室開放を実施しているようだ(「学府の誇りに集ふ 初夏の豊けき二日」『帝国大学新聞』号外, 1926年5月7日, 1面).
- 36) 「若槻首相も迎へ 歓声尽きぬ一日」『帝国大学新聞』165号, 1926年5月10日, 5面.
- 37) 帝国大学新聞によれば「発表された計画を聞くに昨年の如く, 芝居, 軍楽隊こそないが」とある(「学友諸君一新緑林の下に一日歓談しよう」『帝国大学新聞』207号, 1927年5月2日, 5面). 理由は不明だが, 大正天皇崩御による服喪の影響があった可能性がある.
- 38) 『帝国大学新聞』207号(1927年5月2日)5面の各記事.
- 39) 「友呼びともに相集う 融和と懇親の饗宴」『帝国大学新聞』208号, 1927年5月9日, 5面.
- 40) 「主催母体を失って全学懇親会立消え」『帝国大学新聞』251号, 1928年5月7日, 5面. 当初は10月ごろに延期して開催する説もあったが, 結果的には中止となった.
- 41) 『東京大学百年史』通史2, 1987年, 469-470頁.
- 42) 「主催母体を得て 全学開放復活す」『帝国大学新聞』293号, 1929年4月22日, 7面.
- 43) 「経費問題で紛糾したが 学部開放愈々挙行」『帝国大学新聞』294号, 1929年4月29日, 5面.
- 44) 「東大の五月祭は, 昭和4年5月から始まり, 時の小野塚喜平次総長が, 諸種の事情を勘案して, この年から各学部を一斉に5月下旬に2, 3日間授業, 研究活動を休業させ, 学生が中心となって学内の研究施設を公開し, 学生自らの研究成果の展覧などをさせる行事が始まったのである。学生の中に, 何とかして大学祭—高祭の大学版とも言うべきものをやりたい—との空気が生れたのであるから, 総長始め当局によって, 一年前後を, その運動のやり方, 長所, 短所, また左翼からの策謀等について, 十分検討が進められたのであるが, 幸に結論をえて, 前記のとおり, [昭和]4年5月からこれを実現させることとなったものである」(石井勲『東大とともに五十年』原書房, 1978年, 25-27頁). なお石井は1927年以前の大園遊会の存在に触れておらず, この年の全学開放を五月祭の起源とみなしている。石井は1922年3月に東京帝

- 国大学を卒業しており、1923年5月が最後となった大園遊会の存在を知らなかった可能性もあるが、(ただし1924年3月に同大学院を修了している)もし知っていたとすれば、これらを連続性のあるものと評価していないことになる。
- 45) 「陽春の空麗らか 全学に歓声あがる」『帝国大学新聞』295号、1929年5月6日、7面。
- 46) 「主催の中央機関を、各学部の学生代表で組織させ、『五月祭中央委員会』と名付け、自治組織で運営せしめることとしたが、左翼策動の旺盛な時代であったから、思想策動に乗ぜられないことに留意し、堅実な学生を各学部から数名宛選出させ、大学当局からの辞令による任命の形式をふみ、なお各学部長と十分連絡をとって活動することを義務付けられたものである。[...] この時一番警戒せられた点は、中央委員会はその年度限りでこれを解消し、決して翌年度へ同一学生が、委員として残留することがないことであった。」(石井島『東大とともに五十年』原書房、1978年、7-28頁。)
- 47) 初期においては「各学部連合」などと称されていた可能性がある。帝国大学新聞紙上で「連合学協会」の名称が見られるのは1932年が最初であり(「象牙の塔開いて 喜びの全学公開」『帝国大学新聞』430号、1932年5月2日、7面)、記録資料により連合学協会の名称が裏付けられるのは1933年以降である(「連合学協会一途」(東京大学文書館所蔵資料)内の「昭和8年度 連合学協会本部記録」)。なお、この「連合学協会」が組織名称であるか行事名称であるかについての検討は、次節および次々節を参照されたい。
- 48) 石井島『東大とともに五十年』原書房、1978年、28頁。ただし石井は「再開」との立場を取っておらず、1929年の連合学協会(石井によれば「学部開放」)こそが五月祭の起源であるとしている。
- 49) 「連合学協会によって開催される恒例全学公開は[...] 一昨年[1929年] 緑会、昨年[1930年] 経友会のあとをうけて本年は文学部学友会が実行委員会を組織して計画を進めることとなり」[呼物の連合学協会]『帝国大学新聞』381号、1931年4月20日、7面。
- 50) 『帝国大学新聞』各年の記事により調査。1933~1935年については「連合学協会一途」(東京大学文書館所蔵資料)による。
- 51) 「東京帝国大学連合学協会」(プログラム、1934年)。「東京帝国大学連合学協会」(プログラム、1940年)。「東京帝国大学全学五月祭」(プログラム、1941年)。
- 52) 「連合学協会一途」(東京大学文書館所蔵資料)内の文書で、1935年の連合学協会にあたり当日を休業とする旨を定めたもの(1935年4月25日付総長名文書)。
- 53) 『帝国大学新聞』各年の記事により調査。見出しおよび記事の中で行事全体を指して用いられていると見られる呼称(渾名と思われるものも含む)を抽出した。ただし行事全体を指すのかそれを構成する要素のひとつを指すのか曖昧な場合もあり、それらは採用していない。
- 54) 「風光り若葉映ゆ 大学の五月祭」『帝国大学新聞』478号、1933年4月22日、9面。
- 55) 「昭和8年の全学公開に当り、帝国大学新聞は『風光り若葉映ゆ、大学の五月祭』という学生にしてはせいっぱいのこった見出しをつけた。この年フランス映画『パリ祭』が輸入され、帝国大学新聞は辰野隆教授はじめ仏文学者を総動員して座談会を開くなど、『祭』づいていたし、『祭』という言葉が不景気の中に一抹の明り窓を提供するようにも感ぜられたからであろう。これ以後全額公開は公式に五月祭と呼ばれるようになり今日に至っている。」(殿木圭一「『帝国大学新聞』の歴史」『帝国大学新聞』復刻版、富士出版、第1巻、5頁。)
- 56) 1938年の記事のみ、五月祭の祭の字に「まつり」とカナが振られている箇所があった。しかしこれのみをよって「ごがつまつり」と呼ばれることもあったと言えるかは議論の余地がある。同じ年の別の記事では「さい」と振られたものも並存するため、誤植の可能性も否定できない。
- 57) 「あすから帝大で『学内開放』」『読売新聞』1931年5月1日、朝刊、第7面。
- 58) 「帝大五月祭」『朝日新聞』1935年5月6日、東京/夕刊、第2面。「グツと砕けて東大の“五月祭”」『読売新聞』1936年5月1日、朝刊、第7面。
- 59) 「『五月祭』という言葉は、最初から使われたものでなく、準備中には主として『学部開放』と呼ばれていた。[...] 計画が進むにつれて、主催の中央機関を、各学部の代表学生で組織させ、『五月祭中央委員会』と名付け、自治組織で運営せしめることとした」(石井島『東大とともに五十年』原書房、1978年、28頁。)
- 60) 「連合学協会一途」東京大学文書館所蔵資料。また全学による開催となる1941年の五月祭の前に、「従来は事務の方は法文経の文科系統3学部が交代で当番に当たってゐた」(『帝国大学新聞』853号、1941年4月21日、7面)とある。
- 61) 大園遊会期においては帝国大学新聞紙上にプログラムと構内地図が掲載され、プログラムの役割を果たしていたと思われる。
- 62) 「連合学協会一途」(東京大学文書館所蔵資料)内の「昭和8年度 連合学協会本部記録」,「昭和9年度 連合学協会本部記録」,「昭和10年度 連合学協会本部記録」による。
- 63) 「連合学協会一途」(東京大学文書館所蔵資料)内に収録。
- 64) 宮崎ふみ子「戦時下の東京帝国大学学内諸組織」『東京大学史紀要』第1号、1978年、160頁。
- 65) 「全学輿論の反映機関に『学生委員会』を設置」『帝国大学新聞』990号、1946年7月2日、1面。なお、加藤橋夫「(五月祭の今昔) 学問と文化の一般公開」(『教養学部報』11号、1952年5月26日、2面)によれば、この学協会連合会の成立には大学の働きかけもあったようである。
- 66) 帝国大学新聞社は五月祭準備委員会に現金とプログラムの寄付をおこなった(「象牙の塔」を公開 3年ぶりで五月祭)986号、1946年5月21日、1面)。
- 67) 「3年ぶりの五月祭開く」987号、1946年6月1日、1面。
- 68) 「全学輿論の反映機関に『学生委員会』を設置」『帝国大学新聞』990号、1946年7月2日、1面。「五月祭沿革」1026号、1947年5月15日、1面。
- 69) 加藤、前掲記事。
- 70) 「第21回五月祭」『帝国大学新聞』1027号、1947年5月22日、1面。
- 71) 「第22回東大五月祭プログラム」1948年。1947年のプログラムは確認できていないが、それ以外では五月祭においてプログラムに明確に回次が記されたのはこれが初めてである。
- 72) 「五月祭・お膳立も上々」943号、1943年5月3日、3面。なおこの記事は五月祭開催前のものであり、結果的に開催が叶わずカウントがされなかった可能性も考えられたが、「学の殿堂絢爛と

- 開く]（『帝国大学新聞』944号，1943年5月10日，5面）によれば開催はなされたことがわかる。
- 73) 「実は，昭和21年にも五月祭と思われる催事が行われており，その様子も『帝国大学新聞』に記事が書かれていますが […] なぜか回数にカウントされていません。なぜ回数にカウントされなかったのか，その当時の資料やパンフレットがあれば何か分かるかもしれませんが，残念ながら見つけることができませんでした」（村上こずえ「〈蔵出し！文書館 第12回〉五月祭のはじまり」東京大学『学内広報』1507号，2018年2月）。
- 74) M・K「五月祭小史」第50回五月祭プログラム，14頁。ここには「この誤りは昭和29年第27回五月祭からみられ」とあるが，これにあたる1954（昭和29）年のプログラムには第28回と振られており（1923年の大園遊会から数えて29回目）前後に特段のずれもないため，この指摘の趣旨・根拠は不明である。
- 75) 「東京大学第23回五月祭」プログラム，1949年。この回は東大 学生自治会中央委員会の後援も表記されている。
- 76) 「第24回五月祭」プログラム，1950年。
- 77) 修士論文において執筆を予定している。

（指導教員 福留東土教授）